

奇数が好きですか？偶数が好きですか？ 個人の美意識の起源としての誕生日の数字

Birthdate Numbers as the Origin of Individual Aesthetic Preferences

小鷹 研理[†]

Kenri Kodaka

[†] 名古屋市立大学

Nagoya City University

kenrikodaka@gmail.com

概要

筆者は、過去 10 年強にわたって、主に大学の授業の受講生を含む 3205 人を対象に、個人の属性とともに、「奇数」と「偶数」の好みを問う簡単なアンケート実験を実施してきた。解析により、誕生日の数字の属性が「奇数」と「偶数」の好みに（属性が一致する方向で）強い影響を与えることに加え、誕生日に関わらず「偶数好き」は男性よりも女性に多いこと、加齢が「奇数好き」を増大させる効果を持つ等の知見を得たのでこれを報告する。

キーワード：無意識的自己愛、誕生日、加齢、性差、好き嫌い

1. はじめに

人は、名前や誕生日の数字など、自身を象徴する属性やそれに類似した対象に強い愛着を示す傾向がある。2002 年以降、いくつかの研究グループが、無意識的自己愛 (implicit egotism) と呼ばれる概念に関する驚くべき研究を報告してきた。彼らは、個人の無意識的自己愛が、個人情報 (名前や誕生日の数字) に含まれる特定の文字、およびこれらの文字を含む物や人物、つまり、職場、居住地、配偶者、ブランド、GPA や野球のポジションなどに投影されることを示した。例えば、米国で免許が交付された法律家 (Lawyer) と歯医者 (Dentist) の名前の中から、「La」を含む名前「Lawrence / Laura / Lauren など」の人と、「Den」を含む名前「Denice / Dena / Denny など」の人をカウントすると、男女ともに、歯医者には「Den」の名前を含む人数が期待値よりも多く、法律家には「La」を名前に含む人数が期待値よりも多くなった。また、ある特定の数字が含まれる地名の土地に引越してきた住人の誕生日を調べてみると、土地の数字が月と日で一致する誕生日を持つ者の割合が、おしなべて期待値よりも高い。これらの知見は、それ自身は意味を持たない単なる誕生日の数字が、人生の重要な決断 (結婚相手・住む場所・職業) に影響を与えることを示す点で、非常に興味深いものである。

本研究は、こうした関心を引き継ぎ、誕生日の数字が、個人が有する「奇数・偶数に対する好み」に与える影響を検討するものである。Wilkie らは性別の不明瞭な新生児の写真に対して、3 桁の数字をブライミングさせることで、「偶数」が女性を「奇数」が男性へと認識のバイアスをもたらすことを明らかにした。こうした実験結果が示すように、奇数/偶数は、単に数学的な属性を超えて、より概念的な連想イメージに対して開かれている。例えば、偶数は「連帯・調和」や「同質性・対称性」を、奇数 (素数) は「孤独」「特異性」「非対称性」といった連想を喚起するものである。したがって、無意識的自己愛と奇数・偶数の好みの関係を検証することによって、個人の美意識一般の起源についての考察が可能となる。

筆者は、過去 10 年強にわたって、主に大学の授業の受講生を対象に 3205 人の個人に対して、奇数と偶数の好みを問う簡単なアンケート実験を行ってきた。具体的には、最初に奇数と偶数の好みを強制選択で回答させ、そのあとで、年齢・性別・利き手・誕生日の属性を合わせて報告してもらった。その結果は、誕生日の数字の属性が、奇数と偶数の好みに強い影響を与えていることを明らかにするものであった。本稿は、これらの結果を初めて学会の場で報告するものである。

2. 実験

2.1 実験環境

2013 年より 2024 年にかけて、合計 3205 人にアンケート実験を実施した。内訳は、直接聴取 480 人 (2013 年のみ)、学会講演・セミナー等 73 人、高校授業 129 人、大学授業 2523 人 (そのうち 1 年前期の授業が 2350 人) である。

2.2 アンケートの実施方法

授業や講演等でアンケートを実施する場合、以下の設問を順にスライドに表示し、あらかじめ配布した回答シートに解答させた。

A 奇数が好きですか？偶数が好きですか？

B 性別を書いてください。

- C 年齢を書いてください。
- D 右利きですか？左利きですか？
- E 誕生日を書いてください。

直接聴取（480人）では、最初に項目Aを聞いた後に、項目Eを聞いた。項目Bは視認による。年齢と利き手は聴取していない。

2.3 主な参加者属性

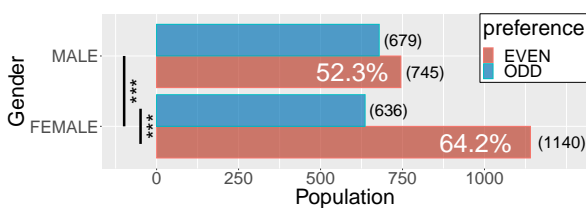
回答者のうち女性が1776人、男性が1424人（その他が5名）、右利きは2518人、左利き（両利き等を含む）は207人である。既に述べたように、アンケートの実施環境の70%以上が、様々な学部の学生が参加する大学一年生向けの授業である。これを反映して、参加年齢層は18~21歳（18歳:1074人、19歳:999人、20歳:310人、21歳:78人）に集中する。それ以外では、12~17歳が132人、22~29歳は60人、30歳以上は65人である。

3. 実験結果（誕生日以外の属性）

3.1 性差

男性は1424人中745人（52.3%）が偶数好き、女性は1776人中1424人（64.2%）が偶数好きと回答した。カイ二乗分布に基づく適合度検定を実施したところ、女性では有意な水準で「偶数好き」が多かった一方で（ $\chi^2(1) = 143.0, p < 0.001$ ）、男性の「偶数好き」の偏りは有意傾向に留まった（ $\chi^2(1) = 3.06, p = 0.08$ ）。さらに独立性検定により、「偶数好き」の偏りが、男性よりも女性で強くなること（ $\chi^2(1) = 46.0, p < 0.001$ ）が示された。

図1 奇数・偶数好きの性差



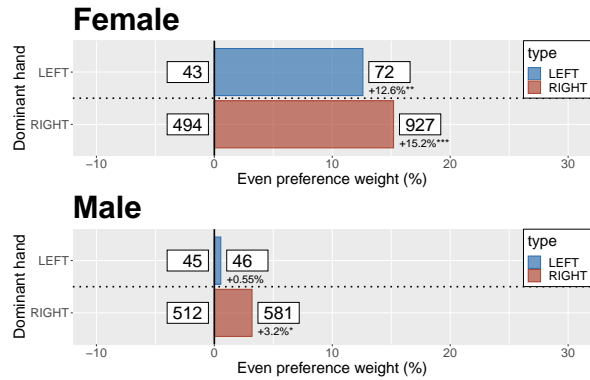
3.2 利き手

男女別に利き手による影響を検証した（「左利き」は、両利きを含むものとして集計した）。女性の「右利き」「左利き」、男性の「右利き」のグループ内では、有意な水準で「偶数好き」が多かった一方で（ $p < 0.01, p < 0.001, p < 0.5$ ）、男性の「左利き」のみ、統計的に偶然の水準に留まった（ $p = 0.92$ ）。また、男女ともに、利き手の間で「偶数好き」の傾向に有意な差は検出されなかった（ $p = 0.57, p = 0.63$ ）。

3.3 年齢

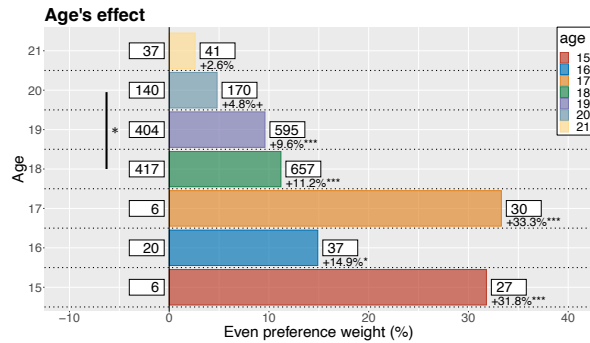
年齢別（30人以上の回答者を含む15~21歳）に「偶数好き」の割合を集計した。総じて、年齢が若くなると

図2 利き手の影響



「偶数好き」の割合が増える傾向が見られる。18~21歳の集団間で独立性検定を実施したところ、唯一、18歳と21歳の集団間で統計的に有意な「偶数好き」割合の差異が検出された（11.2% vs 4.8%, $p < 0.05$ ）。

図3 年齢の影響



4. 実験結果（誕生日の数字）

4.1 数字属性による影響

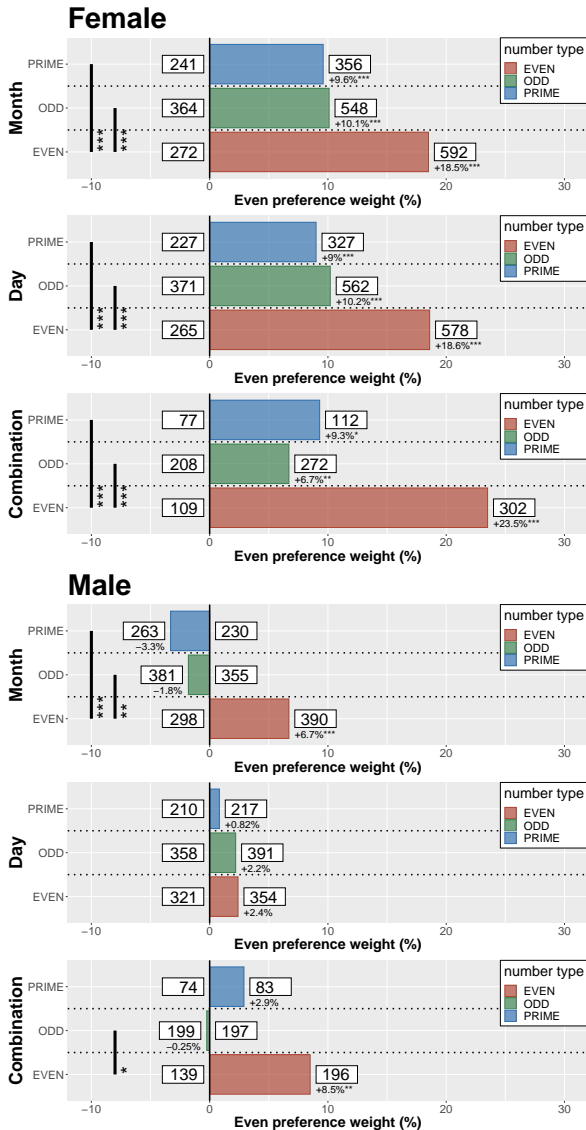
男女別に誕生月・誕生日の属性（奇数・偶数・素数）による「偶数好き」の割合を集計した。「2」は数学的には、「偶数」と「素数」の特性を併せ持つものであるが、以下の分析では「偶数」として扱う。

■月の数字 男女ともに、偶数月の集団の「偶数好き」割合が、奇数月、素数月の集団よりも有意な水準で増大する（奇数-偶数間で女性8.4%、男性8.5%の差）。

■日にちの数字 女性では、偶数日の集団の「偶数好き」割合が、奇数日、素数日の集団よりも有意な水準で増大する一方で（奇数-偶数間で8.4%の差）、男性ではそうした効果がみられなかった。

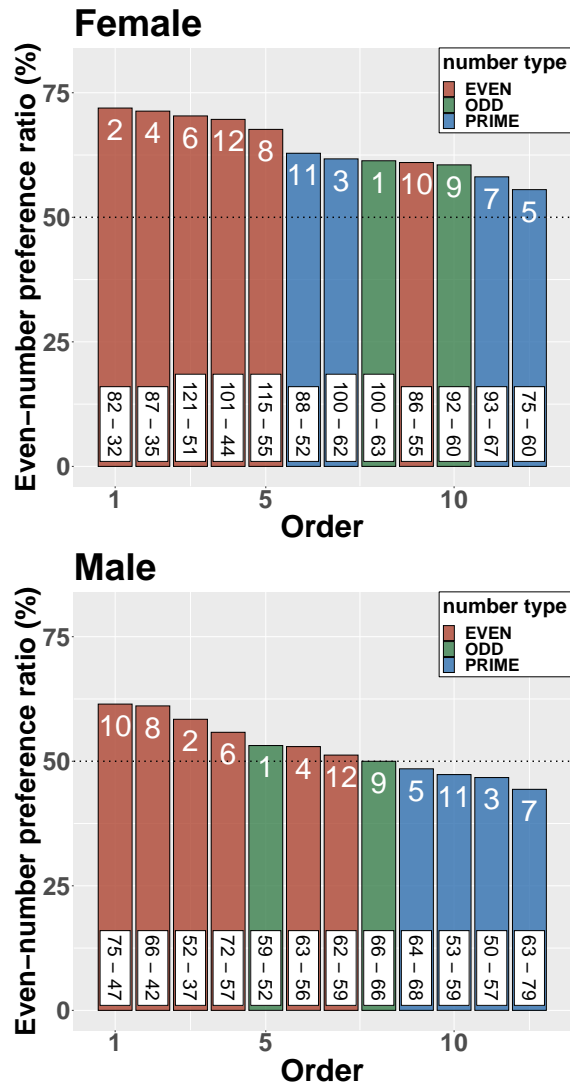
■月と日にちの相互作用 さらに、月と日にちが同じ属性である場合の「偶数好き」の割合を集計したところ、男女ともに、偶数偶数-奇数奇数の集団間で「偶数好き」の割合に有意な差が検出された（女性： $p < 0.001$ 、男性： $p < 0.05$ ）。とりわけ、偶数偶数の女性の集団421人中302人が「偶数好き」と回答し（73.5%）、奇数奇数の集団との差は実に16.8%に及んだ。

図4 誕生日の数字属性の影響



るといふ、明らかな特徴が観測されている。

図5 誕生月の数字の影響



4.2 数字による影響

■月の数字 図5に男女別に、誕生月ごとの「偶数好き」割合を集計し、「偶数好き」割合の多い順にソートしたものを示す。合わせて、数字の属性ごとに色分けを行っている。概して、「偶数好き」の多い左側に偶数月の集団が、「奇数好き」の多い右側に素数月の集団が固まっていることがわかる。実際、男性において「偶数好き」よりも「奇数好き」が多いのは、素数月(3,5,7,11)の各集団に限られる。

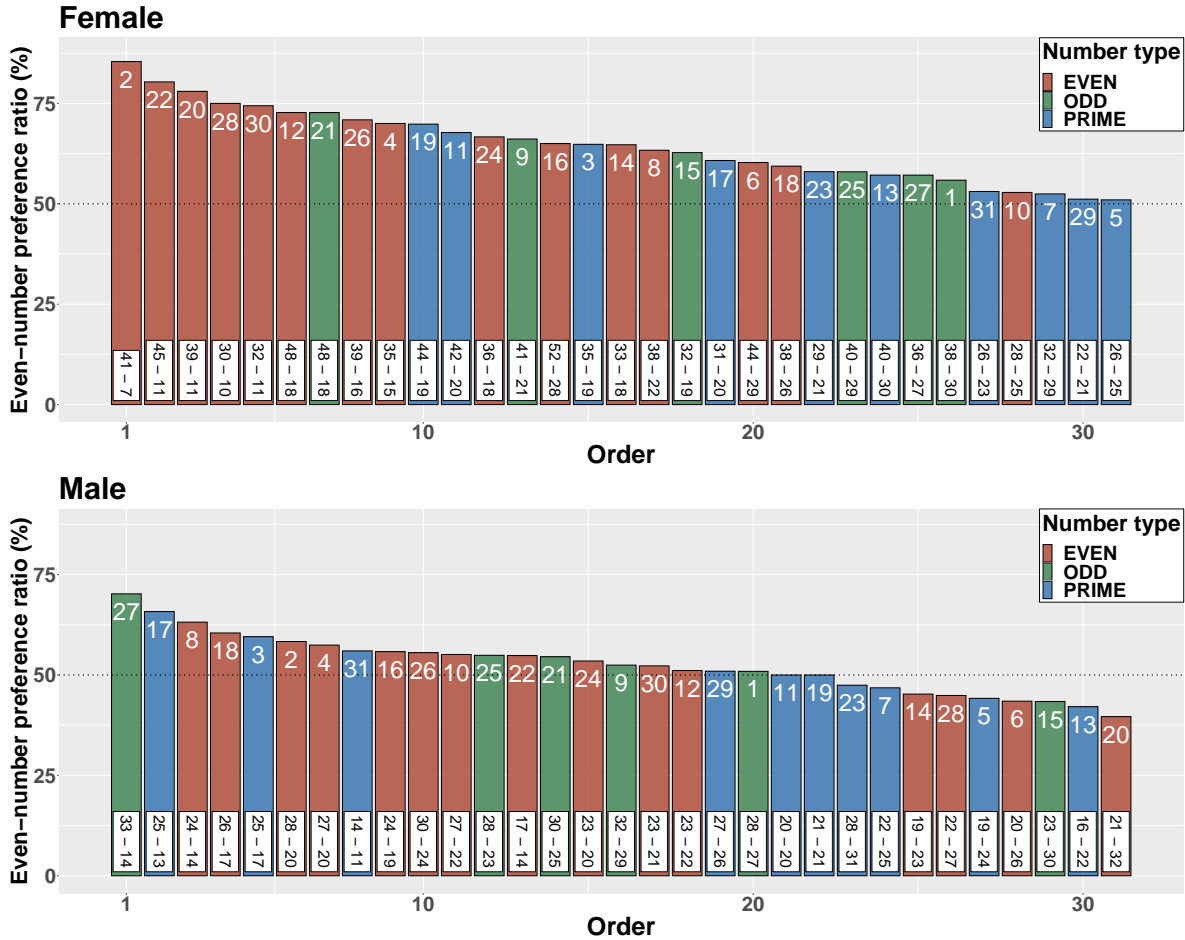
■日にちの数字 図6に男女別に、誕生日の日にちごとの「偶数好き」割合を集計し、「偶数好き」割合の多い順にソートしたものを示す。女性では、「偶数好き」の多い左側に偶数が右側に、「奇数好き」の多い右側に奇数・素数が偏る明確な傾向が観測される一方で、男性では3つの属性がバラバラと出現し、明確な傾向は観測されない。女性では、とりわけ「2」が前景化する数字(2,22,20,12,21)が軒並み上位に出現してい

5. 考察

総じて、誕生日の数字の属性は、個人の「奇数好き」「偶数好き」に強い影響を与えることが明らかとなった。この結果は、無意識的自己愛が数字のみならず、数字の属性レベルで確かに作用していることを示す初めての報告である。

一方で、その影響には男女間で一定の差が存在する。具体的には、女性では、誕生日の月・日にちいずれの数字にも強い影響を受ける一方、男性では、そのような効果がみられるのは月の数字のみである。また、女性を「偶数好き」にする数字には「2」を含む偶数が多く、奇数の中でもとりわけ素数は男女ともに「奇数好き」の上位にランクするものが多い。こうした結果は、「奇数」「偶数」といった属性が、単なる数学的定義を超えて、より概念的な連想世界に対して開かれていることの反映であるとともに、性差そのものが「奇数-偶数」を対とする概念世界と深く干渉していることを示唆す

図6 誕生日の日にちの数字属性の影響



るものである。実際、「偶数好き」が女性に偏るのは、偶数に付帯する概念群と「女性」に付帯する概念群の多くがオーバーラップするためと考えられる。

なお、以上の結果は、本アンケートの実施環境の70%以上が大学一年生を対象としたものであることを十分に考慮する必要がある。例えば、20歳の集団(N=310)は、18歳の集団(N=2074)よりも有意な水準で「偶数好き」の割合が減退するという結果を得たが、こうした変化が、純粋に年齢の効果であるか、「現役で大学に入学した学生」と「浪人を経験した学生」との差異を反映するものか(あるいは双方か)は不明である。サンプル数が少ないもの的高校生(15~17歳)および30歳以上の「偶数好き」割合が74.6%および47.7%であることを考慮すれば、加齢に伴い「奇数好き」が増大することに一定の一般性は認められる。他方で、奇数が「孤独」「特異性」「非対称性」の象徴であるとすると、浪人生活そのものが「奇数好き」の増大に貢献するという仮説もまた説得的である。

本研究は、誕生日と「奇数/偶数の好み」との関係の分析を通じて、誕生日の数字が奇数と偶数の好みに影響を与えることを示した。他方で、「奇数好き」「偶数好き」が、実際に個人の美意識の方向性にどれほど

の強い意味を与えているかは、本分析の水準では全く不明である。本研究の仮説は、「無意識的自己愛」研究が辿ったように) 実世界の重要な決定(職業選択や結婚相手の選択など)において誕生日の属性が何らかの役割を果たしているか否かを検証することで、今後、試されることになるだろう。

文献

Pelham BW, Mirenberg MC, Jones JT (2002) Why Susie sells seashells by the seashore: Implicit egotism and major life decisions. *Journal of Personality and Social Psychology* 82: 469-487.

Pelham BW, Carvallo M, Jones JT (2005) Implicit Egotism. *Current Directions in Psychological Science* 14: 106-110.

Anseel F, Duyck W (2008) Unconscious applicants: a systematic test of the name-letter effect. *Psychological science* 19: 1059-61.

Brendl CM, Chattopadhyay A, Pelham BW, Carvallo M (2005) Name Letter Branding: Valence Transfers When Product Specific Needs Are Active. *Journal of Consumer Research* 32: 405-415.

Kitayama S, Rarasawa M (1997) Implicit Self-Esteem in Japan: Name Letters and Birthday Numbers. *Personality and Social Psychology Bulletin* 23: 736-742.

Jones JT, Pelham BW, Carvallo M, Mirenberg MC (2004) How do I love thee? Let me count the Js: implicit egotism and interpersonal attraction. *Journal of personality and social psychology* 87: 665-83.

Wilkie, J. E. B., & Bodenhausen, G. v. (2012). Are numbers gendered? *Journal of Experimental Psychology: General*, 141(2). <https://doi.org/10.1037/a0024875>

小鷹研理, 『身体がますますわからなくなる』(2024), 大和書房